

貨幣の必然性 (V)

——宇野理論の一検討——

尼 寺 義 弘

目 次

はじめに

- I 貨幣の萌芽形態＝単純な価値形態
- II 単純な価値形態における等価形態の意義
- III 価値形態論＝交換過程論（以上、『阪南論集』第9巻第6号）
- IV A 単純な価値形態 より B 全体的な価値形態 への移行（『阪南論集』第10巻第1号）
- V B 全体的な価値形態 より C 一般的価値形態 への移行（『阪南論集』第10巻第2号）
- VI D 貨幣形態（『阪南論集』第10巻第5号）
- VII 価値形態論の方法（本号）

む す び

VII 価値形態論の方法

- a) 価値実体の析出
- b) 私的労働の特殊社会的形態
- c) 価値概念と価値形態
- d) 価値形態論の方法
- e) 単純な価値形態の分析
- f) 価値形態の移行

む す び

われわれは、以上のように、A 単純な価値形態 より D 貨幣形態
にいたる価値形態の理論的展開はいかにして可能であるか、を検討してき

た。それは価値の実体規定を基礎とする価値概念とその定在様式との矛盾
を動力として展開されねばならないものであった。そして価値形態は価値
概念を一般的に充足する表現形態である C 一般的価値形態 によって
理論的には完成するものであった。そこで、われわれは今一度その展開を
方法的に反省してみよう。

a) 価値実体の析出

マルクスは『資本論』初版・本文の価値形態を論究した最終的な結論に
おいてつぎのように述べている。

「しかし決定的に重要なことは、価値形態と価値実体と価値量とのあい
だの内在的で必然的な連関を発見すること、すなわち観念的に表現するな
らば、価値形態は価値概念から発生することを証明することであった。」¹⁾

この結論は、マルクスが、『資本論』冒頭の商品の分析から価値形態の
究明にいたるまでの理論的過程を、商品の価値に即してその要約を述べた
ものといえよう。すなわち現行版『資本論』第1巻で言えば、第1章の第
1節・第2節・第3節の関係は、商品の二要因の分析、商品に表示されて
いる労働の二重性の解明、価値という社会的に独自なものの表現形態の論
証、という三段階の関係になっている。そしてその過程を商品の価値とい
う側面からみれば、価値実体・価値量・価値形態という展開方法になって
いるのである。

ところで、マルクスはこの価値実体・価値量・価値形態という三つのあ
いだの「内在的で必然的な連関」をどのようにして発見したのであろうか。
ヘーゲルのカテゴリーの進行のように、何ものをも前提せず、ただ価値と
いう概念それ自体の分析によってみいだされるその概念のもつ矛盾を動力
として、価値実体・価値量から価値形態というより新しい概念に到達した
のであろうか。けっしてそうではない。

マルクスは、価値とは何かを考察するばあい、その最も具体的な、われ

われの直観に映ずる姿である商品の価格形態、つまり貨幣形態から出発する。そして貨幣形態から、商品の価値が交換価値という姿をとる最も単純な形態であるAへと対象を純化している。さて、Aは一商品と他の一商品との等置関係によって成り立っているが、この関係それ自体は何を意味するのであろうか、として分析をさらに進める。つまり商品の価値とは何かを考察するばあい、その最も具体的な形態である貨幣形態を捨象し、Aの両極の経済的形態規定をも度外視して、単なる商品と商品との関係という単純な事実事態を純化することによって対象をみているのである。一般に、マルクスは対象を考察するばあい、その複雑な具体的な形態でそれを見るのではなく、最も単純な関係に対象を純化し、それを分析し、対象を把握しているのである。最初の商品の分析もその一例であるといえる。

だから、マルクスは価値とは何かを解明するばあい、諸商品が交換価値をもつということ、ないしは諸商品の交換関係という単純な事実をつねに前提している。そしてその事実の分析から価値という「経済的質」²⁾を明確にしているのである。その分析をつぎにみることにしよう。

マルクスは、前提されている諸商品の交換価値ないしは交換関係を、正常な姿で、つまり純粋に抽象することによって、諸商品が互いに等置される関係を分析する。つまり異なる使用価値をもつ諸商品が何故に等置されるのか。等置されるためには、等置される諸商品に「ある共通なもの」³⁾が存在するからではないのか。一体、それは何かとして分析を進める。さて、その共通なものは異なる効用をもつ使用価値ではありえないし、またそれをつくりだす目的を規定された具体的労働でもありえない。なぜなら、使用価値およびそれをつくる具体的労働は同質性ではなくて、異質性においてこそ意味をもつからである。だから、共通ものではありえない。まして使用価値に対する商品所有者の主観的欲望ではけっしてありえない。なぜなら、それは商品所有者によって千差万別であるからである。

そうとするならば、「商品体になお残るものは労働生産物という属性だけ

である。」⁴⁾ しかも、それは労働の具体性を捨象された人間労働力の支出のかたまり、つまり無差別な人間労働そのものの対象化されたものである。それが等置される商品の「ある共通なもの」、つまり商品の価値である。だから「価値としては、諸商品は結晶した労働にほかならない」⁵⁾のである。したがって、価値の実体は抽象的人間労働であり、価値量の尺度はその労働量すなわち労働時間である。^注

注 マルクスが等置される商品から、それらに共通なものである価値とその実体を析出している方法は、科学の一般的方法である分析的方法にしたがっている。つまり異なるものが等置されるのは、両者が同じ「単位」に還元されるからこそ等置されるのである。つまり両者に共通の基礎があるからである。マルクスは『剰余価値学説史』⁶⁾や『資本論』⁷⁾において、例をあげて説明している。たとえば、物と物との距離というのは、両者が空間という共通の単位に属しているから距離があるといえるのである。また多角形を測定したり、比較するためには、多角形を三角形という共通の基礎に分解し、三角形を底辺と高さとの積の二分の一に還元している。つまり異なるものが、等置されたり、比較されたりするためには、両者が共通の単位、ないしは基礎に還元されねばならないのである。この科学の一般的方法に価値の分析もしたがっているのである。

ところが、宇野氏等はこの分析的方法の意義を全く認められず、逆にその方法を徹底して排除される。だから、氏等の価値概念には、その基礎となるべき実体規定がない。いわば蛇の殻の概念となるのである。

1) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 34.

2) ditto, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie*, S. 59.

3) ditto, *Das Kapital*, Buch I., M-E Werke, Bd. 23., S. 51.

4) *ebenda*, S. 52.

5) ditto, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 4.

6) ditto, *Theorien über den Mehrwert*, Dritter Teil, Dietz Verlag Berlin, 1962, SS. 141-142.

7) ditto, *Das Kapital*, Buch I., M-E Werke, Bd. 23., S. 51.

b) 私的労働の特殊社会的形態

さて、われわれは、以上のように、価値の実体は単なる労働そのもの、

つまり抽象の人間労働であり、価値量の尺度は労働量、つまり労働時間であることを知った。

ところで価値の実体である抽象の人間労働は「生理学的意味での人間の労働力の支出」¹⁾であり、すべての具体的な労働の一属性として、いかなる社会においても、またいかなる時代においても存在している。こうしたいわば歴史貫通的な範疇である抽象の人間労働はいかなる条件のもとで商品の価値を形成することになるのであろうか。それを考察するために、われわれは労働生産物が使用価値のほかに価値という性格をもつ社会、つまり商品生産者の社会の成立条件をつぎにみることにしよう。^注

注 宇野氏は、いわゆる「単純商品生産社会」の想定を、機械的な抽象であるとして排除される²⁾。もちろん、そのような「社会」は存在しないし、労働生産物が一般的に商品という形態をとる社会は、近代的な資本の成立をまっとはじめて実現するものである。

だが、われわれは、資本関係も、貨幣関係をも捨象して、商品生産者の相互の関係はどのようにして成り立っているかを、その本質において把握するためには、純粋の商品生産者の社会を抽象することは必要であると考え。そのことによって、同時に、貨幣関係、資本関係を明確にするための基礎が与えられることになるのである。

労働生産物が一般に商品という形態をとる社会では、個々の生産者は自分自身の私的な勘定で専門的に同じ商品を生産している。そしてその商品を、自分のさまざまな欲望の充足に必要な他人の生産した諸商品と互いに交換しあう。そうすることによって、商品生産者たちは自分自身の経済生活を維持しているのである。つまり商品生産者たちは、生産手段の私有にもとづく私的な生産をおこないながら、同時に社会的分業の一環を担っているのである。だから、彼の労働は直接的には自己の判断によっておこなう私的労働である。だが、その労働が同時に他人のための労働、社会的労働であるかどうかは、「相互他人性」³⁾を原則とするこの社会では、自分の商品が実際に交換されてはじめて確認されるのである。つまり彼の労働は、

その生産物が交換されてはじめて社会的なものであったといえるのである。そしてその交換の統一的な基準となるものが、生産物を商品として刻印する価値である。商品生産者たちは交換にさきだって彼らの生産物を互いに価値として等置しあい、価値に従って交換をおこなうのである。だから、商品生産者の社会では、私的労働が直接的には社会的労働としては妥当しないで、私的労働の具体的諸形態を捨象したところの、あらゆる労働に共通な、同等な労働としての、つまり価値の実体であるところの抽象の人間労働という形態で、はじめて社会的労働として現われるのである。だから、私的労働の社会的形態は抽象の人間労働であり、その物的表現が価値という形態にほかならないのである。その価値を基準にして交換がおこなわれるのである。そうした「廻り道」⁴⁾をしてはじめて私的労働が社会的なものであることが確認されるのである。だから、価値は物的に異なる諸商品の「単位」である。だが、そうさせているのは私的な労働にもとづく社会である。このように労働生産物が商品になるための条件——それは同時に抽象の人間労働が価値という形態を形成する条件である——は、社会的分業の発展と生産手段の私有にもとづく私的労働の発展とである。

さて、以上のように、抽象の人間労働が価値という特殊歴史的な形態に結実するためには、商品生産という条件が必要である。つまり抽象の人間労働は超歴史的なものであるが、それを「労働の特殊社会的な形態」⁵⁾とする社会においてはじめて、価値が形成されるのである。

1) K. Marx, *Das Kapital*, Buch I., M-E Werke, Bd. 23., S. 61., SS. 85–86.

2) 宇野『経済学方法論』12頁。20頁。同『講座原論』31頁。

3) K. Marx, *Das Kapital*, Buch I., M-E Werke, Bd. 23., S. 102.

4) F. Engels, *Anti-Dühring*, M-E Werke, Bd. 20., S. 286.

5) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 32.

c) 価値概念と価値形態

ところで、あらゆる労働の具体性をはぎとられた、質のどんづまりである抽象の人間労働の結晶として、価値は同質のものであり、較量可能なものである。だから、あらゆる商品は一定の分量をとれば、互いに計量しあい、代りあい、交換されうるものである。つまり価値は人間労働という社会的単位の客観的表現であるから、商品世界の社会的性格を表現するものである。そして商品世界の社会的性格は商品の交換可能性にあるのであるから、価値は交換能力ということができる。

さて、われわれは価値を質的に同等なもので量的にのみ比較可能な交換能力であると規定した。それは商品社会に住む人々にとって、日常的な思想形態である「価値」として意識される。¹⁾

われわれの理論的展開は、その「価値」という直観や表象を概念に加工し、概念的に展開する過程であった。だから、ここでわれわれの述べる価値は、商品世界に独自の社会的関係を表現する経済的質である。それは自然からではなく、「社会」²⁾から生まれたものであるから、つまり社会関係の物象化したものであるから、価値そのものを具体的に目で見、直接、手で触れることはできない。というのは、使用価値と価値との統一物である商品そのものは、われわれの感性の対象である商品体、自然形態であるにすぎない。だから、その商品が価値であることを自分の体で、つまり価値が潜在的に含まれている商品自身の体で表現することはできない。だから、社会的な交換妥当力をありありと具体的に表示するためには、他商品の体を価値物として自分自身に等置し、その他商品の体で表現する以外にはありえないのである。つまり、これが価値である、ということを顕在化させるためには、他商品の身体を自分自身の価値鏡とし、それで表現するという、廻り道をとらざるをえないのである。このように、社会的関係の物象化であり、質的に同一なものである価値なる概念は自分自身を明示し、表

現するための定在様式を要請せざるをえないのである。かくして価値の表現形態としての価値形態の論証がなされねばならないのである。

だが、価値形態の価値概念からの要請は、ヘーゲルの述べているような概念それ自身の自己展開の過程ではけっしてない。マルクスは絶えず、商品が交換価値をもつという事実、商品の交換関係という事実を表象にしているのである。そしてその表象を分析し、それぞれの要因、実体に規定を与えながら上向し、日常的な意識としての「価値」を概念的に把握しようとしているのである。すなわち商品生産者たちは交換において、彼らの生産物を互いに価値として等置するのであるが、それがいかなる意味をもっているのかを彼らは知らない。彼らが注目するのは相手商品との交換の量的な大いさだけである。そして日常の意識にある、時々に変動する交換価値を、科学的につかむために、マルクスは、まず交換価値の背後に価値をみだし、それを徹底的に分析することからはじめている。交換価値→価値→価値の実体というその過程は、すでにみたとおりである。

ところで、マルクスはその方法をつぎのように述べている。

「研究の進行は、われわれを、価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値につれもどすことになるであろう。しかし、この価値は、さしあたりまずこの形態にはかかわりなしに考察されねばならない。」³⁾

つまり、マルクスは当面の対象となっている価値を、その現象諸形態である交換価値、貨幣形態などから、頭の中で切り離し、価値を抽象し、浮きだたせて分析しているのである。そしてそのさい捨棄された諸形態を、価値の必然的な現象形態として、つぎに再び考察の対象とするのである。これをマルクスは価値形態を究明する最初のところでつぎのように述べている。

「われわれも、じっさい、諸商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている価値を追跡したのである。いま、われわれは再び価値のこの現象形態に帰らなければならない。」⁴⁾

貨幣の必然性 (V)

97

このように、商品が交換価値をもつという事実から出発し、それを分析し、再び交換価値へ帰るのである。その過程は、ヘーゲルの概念の進行に即してのみいえば、価値の概念がその定在様式である価値形態を生み出す過程であるともいえよう。

- 1) 福井孝治『経済と社会』日本評論社。昭和14年。291-392頁。参照。
- 2) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 4.
- 3) ditto, *Das Kapital*, Buch I., M-E Werke, Bd. 23., S. 53.
- 4) *ebenda*, S. 62.

d) 価値形態論の方法

さて、われわれは、商品の交換価値を価値の現象形態として、価値形態としてとらえた。その理論的過程は商品が交換価値をもつという事実から出発し、それを抽象・分析することによってえられたものである。価値形態の論究についても、マルクスは同様の方法にしたがっている。すなわち諸商品がその雑多な自然的形態とは異なって、一つの共通な社会的形態——貨幣形態をもっているという事実から出発し、その原基形態である最も単純な価値形態へ遡源し、そこで貨幣形態の本質は何かを徹底的に分析しているのである。つまりマルクスが、D 貨幣形態 から A 単純な価値形態 へ遡源し、そこでDの本質を分析するのは、Aが一商品と他の一商品との関係という価値形態を成立させる始原的形態であり、Dの本質がAにおいて最も鋭く示されているからである。マルクスはこのことをつぎのように述べている。

「貨幣形態の概念における困難は、一般的等価形態の、したがって、一般的価値形態一般の、形態Ⅲの、理解に限られる。しかるに、形態Ⅲは、逆の連関で形態Ⅱに分解し、そして形態Ⅱの構成要素は、20エルレのリンネル＝1着の上着 あるいは X量の商品A＝Y量の商品B という形態Ⅰである。さて、使用価値と交換価値とが何であるかを知っているならば、

98

阪南論集 第11巻第3号

この形態Ⅰは、ある任意の労働生産物、たとえばリンネルを商品として、すなわち、使用価値および交換価値という対立するものの統一として、表示するための最も単純な・最も未展開な様式であるということがわかる。そこでそれと同時に、20エルレのリンネル＝1着の上着 という単純な商品形態が、20エルレのリンネル＝2ポンド・スターリング というその完成姿態、つまり貨幣形態を獲得するために通過しなければならないところの変態系列が容易にわかるのである。¹⁾」注

注 この一節は「初版・本文」にはない。価値形態の補足的な、もっと学校教師的な説明が必要だという、ドクトル・L・クーゲルマンのすすめで、弁証法的な思考に慣れていない読者にもわかるように書いた「初版・付録」と、「再版」以降には、研究の過程が貨幣形態についての論究の最終的部分で述べられている。

ところで、価値形態論の探究の出発点であり、叙述の到達点である貨幣形態についての記述が「初版・本文」で欠如していることが、一見すると価値形態の不成立で終るかにみえる「初版・本文」の「形態Ⅳ」と多少とも関係しているように思われる。

このように、DからAへ遡及することによって、Dは使用価値と価値との統一物としての商品が、自分自身を表現する形態の、より一層展開された、完成した価値形態であるということがわかるのである。だから、Dの分析は自然的形態と社会的形態との統一物の最も単純な表現形態であるAの分析につきるといってよいのである。つまりAはDの本質を最も鋭く示す価値形態である。だから、マルクスは最も単純な、最も未展開な、始原的形態であるAの分析に多くの紙幅をさいているのである。つまり、Aは「貨幣の即自」²⁾であり、したがって「単純な商品形態は貨幣形態の萌芽なのである。」³⁾

このように、DからAへ遡源し、AでDの本質を明らかにし、そうして再び、AからDへ復帰するのである。そうした理論的作業をへてはじめて、前提されているDがその本質から把握されるのである。つまりDを概念的

にとらえるためには、 $D \rightarrow C \rightarrow B \rightarrow A$ へと遡及し、分析することによって、DをAという最も単純な形態へ純化し、それまでの商品の分析で、理論的に得られた価値概念の助けを借りて、Aを価値概念から根本的に説明し、そうして再び、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ へとという後方への旅を、つまりAからDへの発展諸形態をたどることによって、Dの生成を明らかにしなければならぬのである。

これについてマルクスはつぎのように述べている。

「しかし、いまここでなされなければならないことは、ブルジョア経済学によってはかつて試みられなかったこと、すなわち、この貨幣形態の生成を証明することであり、したがって、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展を、その最も単純な最も見すばらしい姿から、光まばゆい貨幣形態に至るまでを追跡することである。これによって同時に貨幣の謎も消え去るのである。」⁴⁾注

注 この一節はAの分析とAからDへの生成という叙述の目標を述べた重要な箇所であるが、「初版」の「本文」、「付録」とも欠如している。

かくして、最も単純な価値関係に含まれているAの分析とAからDへの理論的な展開がなされねばならないのである。

- 1) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, SS. 783-784.
- 2) *ebenda*, S. 15.
- 3) ditto, *Das Kapital*, Buch I, M-E Werke, Bd. 23., S. 85.
- 4) *ebenda*, S. 62.

e) 単純な価値形態の分析

さて、われわれは、一商品と他の一商品との関係という最も単純な価値関係に含まれている価値表現であるAをみることから始めよう。

Aは、すでにみたように、DからC、B、A へと遡源したものであり、

直接にはBの構成要素である。それと同時に、Aは交換価値の分析からえられた価値の概念が自分自身の定在を要請する最初の形態である。したがって、Aは価値の現象形態とは何か、を最も端的に示すものであり、価値形態一般につづじる諸規定を与えうる形態である。つまりAを解明してこそDの本質が把握しうるのである。だからこそマルクスはAの分析に最大の力点を置いているのである。

さて、Aは一商品の価値が他の一商品の使用価値で表現される価値形態である。そのばあい商品の価値という純粋に社会的なものが、何故に、他商品の使用価値という純粋に自然的なもので表現されるのか？つまり、本来は、単なる有用物であり、欲望の対象であり、商品体をなすにすぎない使用価値が、何故に、その正反対のものである価値という商品世界に独自の社会的なものを表示することができるのか？超歴史的な自然的形態が特殊歴史的な社会的形態となることができるのか？この全く奇妙な関係を、つまり「異様な事実」¹⁾を承認し、解明することに価値形態論の肝心な問題がある。ここに一切の困難の軸点ともいべき価値形態の根本問題がある。これをマルクスは周知の「廻り道」の論理によって、はじめて明らかにしたのである。マルクスは述べている。

「商品は、本来、二面的なもの、すなわち使用価値および価値、有用的労働の生産物および抽象的な労働凝固物、である。それゆえ商品は、それがあるところのものとして自らを表示するためには、その形態を二重にしなければならない。使用価値の形態は、商品が生れながらにもっている。それは商品の自然形態である。価値形態は、商品が他の商品との交際においてはじめてこれを獲得する。だが商品の価値形態は、それ自身やはり対象的な形態でなければならない。商品の唯一の対象的な形態は、その使用上の姿・その自然形態である。ところが、ある商品たとえば、リンネルの自然形態はその価値形態の反対物であるから、リンネルはある他の自然形態を、ある他の商品の自然形態を、その価値形態としなければならない。

貨幣の必然性 (V)

101

それは、直接に自分自身に対してなしえないことを、直接に他の商品に対して、かくして廻り道をすることによって自分自身に対してなすことができる。その商品は自分の価値をそれ自身の体で、すなわちそれ自身の使用価値で、表現することはできない。しかしそれは、直接的な価値の定在としてのある他の使用価値あるいは商品体に関係することはできる。その商品はそれ自身のうちに含まれている具体的な労働に対して、抽象的人間労働の単なる実現形態としてふるまうことはできないが、他の商品種類に含まれている具体的な労働に対してはそうすることができる。そうするためにはその商品はただ、他の商品を自分に対して等価物として等置するだけでよい。一商品の使用価値は、一般にこのような仕方である他の商品の価値の現象形態として役立つがかりで、その他の商品のためにのみ存在する。」²⁾

このように「廻り道」の論理は、商品の価値が自分の担い手である自身の使用価値で表現できず、他商品の使用価値を自分自身に等価物として等置し、それで表現するというところにある。そのことによって、同時に価値は自分自身の担い手である使用価値から自分を区別しているのである。この「廻り道」は商品の価値というものが、一切の質も内容もない単なる抽象的人間労働の結晶という何らの対象性をもたないことから、すなわち社会的単位が、いわば「一つの思惟物」³⁾であることから由来している。つまり、われわれの目で見、手で触れることのできない価値なるものが、その対象性をもつためには、物的な関係である商品と商品との関係においてその対象性を表示する以外にはありえないということから由来しているのである。そして二商品の物的関係において、価値の表現手段となる等価商品の使用価値は「一つの新しい役割」⁴⁾を、価値の定在形態という役割を果たすのである。ここに「貨幣の秘密」⁵⁾がある。つまり等価商品は「具体化された価値としてのみ、価値体としてのみ意義をもつのである。」⁶⁾したがって、目に見ることのできない商品の価値なるものは、等価商品におい

102

阪南論集 第11巻第3号

て、これが価値であるということを具体的にありありと示しているのである。だから、等価商品はその生のままの姿で価値物であり、したがって、直接的交換可能性の形態にある。したがって、商品の自然的形態である感性的なものが、その正反対のもの、超感性的な、社会的なものとなっているのである。この転倒は、価値を形成する労働が具体的なものではなく、抽象的人間労働であることから必然的である。

つまり商品生産社会においては、労働の具体性ではなくて、抽象性において、はじめて一般性を、したがって社会性をえるのであるから、価値鏡の役割を演ずる商品は、その具体的な効用においてではなく、価値の化身としてのみ意義をもち、その商品をつくる具体的な労働は、人間労働の実現形態としてのみ意義をもつというのは当然のことである。このように価値の実体が抽象的人間労働であることが論証されていることからこそ、この転倒も論証しうるのである。この意味でも、労働の二重性の批判的な証明をおこなった点を、マルクス自身が、「経済学の理解にとって跳躍点」⁷⁾と述べ、「僕の本の最良の点」⁸⁾の一つとして、あげていることが理解されるのである。

1) 久留間鯨造『価値形態論と交換過程論』105頁。

2) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 20.

3) *ebenda*, S. 17.

4) *ebenda*, S. 20.

5) *ebenda*, S. 21.

6) ditto, *Das Kapital*, Buch I., M-E Werke, Bd. 23., S. 66.

7) *ebenda*, S. 56.

8) Marx' *Brief an Engels vom 24. August 1867.*, M-E Werke, Bd. 31., S. 326.

f) 価値形態の移行

つぎに、われわれは、価値形態が経過する変態系列を考察することにしよう。

貨幣の必然性 (V)

103

マルクスは、すでにみたように、DからAへ遡源し、一商品と他の一商品との価値関係という単純な形態に対象を純化して、Dの本質をつかまえた。さて、Aはどのような理論的過程をたどって、Dへ復帰することができるのであろうか。それをみることにしよう。

Aは社会的なものである価値の必然的な現象形態である。それは、もちろん、一商品と他商品との関係がたえず表象に浮べられているのであり、それを分析した結果として、Aは価値の概念がその定在を要請する最初の発生的形態であることが明らかとなったのである。だから、Aは価値概念を充たす価値形態であり、肯定的な(積極的な)定在の必然性をもっているのである。だからこそ、Aにおいてすべての価値形態に妥当する一般的規定が与えられているのである。

ところで、Aは価値の必然的な現象形態であるが、価値の概念に対してはいまだ不十分な価値形態である。何故なら、価値は人間の労働という同じ社会的単位の表現であり、すべての商品は価値としては、質的に同等なものであり、量的にのみ比較可能なものであるからである。だから、商品はその一定量をとれば、同等な妥当力を持ち、互いに代りあい、互いに置きかえられ、交換可能なものでなければならない。したがって、商品の価値はすべての他の商品に対して、この性質を示しうる形態、つまり質的同等性と量的比率性を示しうる形態をもたなければならないのである。ところが、Aは一商品の価値が唯一の他商品で表現される価値形態であるので、価値としては自分自身の担い手である使用価値から区別されているにすぎない。だから、Aは価値の概念(本性)に対して不十分である。つまり価値の概念とその定在様式は一致していない。だから、Aは価値の概念を充足する、より展開された価値形態へ移行せざるをえない。

ところで、価値としてすべての商品は同一であるから、一商品はあらゆる他商品と価値関係を取りむすぶことができる。だから、いずれの商品をも等価形態にとることができる。そして、このことはさきに、Dからの純

104

阪南論集 第11巻第3号

化の過程でみたように、Aは B「全体的な価値形態」の構成要素、基礎的要素であり、Aの総計がBである、という表象に合致している。したがって、AはBへ移行しうるのである。^注

注 マルクスは「再版」でホメロスの例をあげている。だから表象を抽象し、単純な事実に純化し、分析すると同時に、たえず歴史的過程を念頭においているのである。

マルクスはこの移行についてつぎのように述べている。

「20 エルレのリンネル＝1 着の上着、あるいは、20 エルレのリンネルは1 着の上着に値する、というような等式は、明らかに、商品の価値を全く限られたもの、一面的なものとして表現するだけである。もし私が、たとえばリンネルを上着と比較するかわりに、他の諸商品と比較するならば、私はまた、20エルレのリンネル＝U量のコーヒー、20エルレのリンネル＝V量の茶、等々のような、他の相対的価値諸表現を、他の諸等式をうけとる。リンネルはそれと異なる諸商品とちょうど同じだけの異なる相対的価値表現をもつのであり、そしてその相対的価値表現の数は、新らしく登場する商品種類の数とともにたえず増加するのである。」¹⁾

かくて、一商品はすべての他商品と価値関係を取りむすび、いずれの商品をも等価形態にとることができる。つまり、Bへ移行するのである。

さて、Bは一商品の価値がすべての他商品で表現される価値形態である。だから、Bは「限られたもの、一面的なもの」としてのAの不充分性を解決している。それと同時に、B自身の積極的な役割が明らかとなってくる。つまり各商品はそれぞれ「商品世界に対して社会的関係」²⁾をむすんでおり、一商品の価値はすべての他商品と同等なものとして表現されているので、商品の価値が「はじめて、真に価値として、すなわち人間の労働一般の結晶として、表現」³⁾されているのである。だから、商品の価値がその担い手である使用価値とは無縁のものであることが、Bという価値形態それ自身から明らかとなる。そして価値の量的規定の表現も、つまり交換比率

貨幣の必然性 (V)

105

もAでは偶然のようにみえたことが、表現形態そのものからして、その実体規定にもとづくことが、必然であることが明らかとなってくる。このように価値の概念に一致した、より進んだ価値形態がBである。

以上のように、Bは一商品の価値を商品世界全体で表現する価値形態であり、Aの不充分性を解決している。したがって、Bは価値形態の変態系列の一つの段階として積極的な定在の必然性をもつのである。

ところで、Bは抽象の人間労働の結晶としての価値の概念を十全に充足する表現形態であるのであろうか。それをつぎにみることにしよう。

マルクスは、周知のように、Bの欠陥を相対的価値形態からみて、三つあげている。

第一は、新しい商品が現れるたびに、表現手段がまして、価値表現の表示系列が「未完成」⁴⁾である。

第二は、一商品の価値が無数の他商品で表現されるが、それを構成するそれぞれの価値表現がバラバラであり、「雑然とした寄木細工」⁵⁾を成しており、統一性のない価値表現である。

以上の第一と第二の欠陥は、一商品の価値の相対的な表現という見地からみたものである。いわば一商品それ自身の内部の問題である。

第三は、すべての商品の価値が、それぞれ商品の世界全体で表現されるのであるから、いずれの商品の価値表現も他のものと違ったものであり、すべての商品にとっての共同的な価値表現は成立していない。これはいわば各商品の、相互の問題である。^注

注 この第三の欠陥は、「初版・本文」の「形態IV」が入りこんだものであろうか。その「形態IV」は、すべての商品が「形態II」の形式をとったものであり、一般的等価形態の成立の不可能を論じているようにみえる。だが、久留間氏によれば、けっしてそうではなく、「それまでに展開してきた価値形態論の結果を反省しているのであり、それによってその観点の抽象性にもとづく認識の限界を明らかにし、より具体的な観点到立つ交換過程論との間の境界を暗示しているのである。」⁶⁾ われわれもこの説に同意したい。なお、「初版・本文」の「形

106

阪南論集 第11巻第3号

態II」では、欠陥規定が欠如し、たんに「逆の連関」のみで「形態III」へ移行している。

以上のBの三つの欠陥は、当然、その等価形態に反映している。つまり一商品の価値が商品世界全体で表現されるのであるから、等価形態の商品はそれぞれが特殊の等価物であり、互いに一般的等価物となろうとして、お互いに排除しあうのである。だから、等価商品はいずれも一般的等価物の地位を占めようとして、いずれもがその地位を占めることができないという「制限された諸等価形態があるだけである。」⁷⁾

だから、Bは商品の価値が「はじめて、真に価値として、すなわち人間の労働一般の結晶として、表現」されるものではあるが、いまだ人間の労働は「統一的な現象形態をもってはいないのである。」⁸⁾

だから、Bは価値の概念に対して不十分な定在様式であるといえる。だから、Bはその不充分性を解決するより進んだ価値形態へ移行せざるをえない。

ところで、Bは、 $D \rightarrow C \rightarrow B \rightarrow A$ へという抽象の過程でえられたものである。そして、Bは、Cの右辺と左辺を入れかえたものであり、「それ自身において、潜在的に、すでにこの系列に含まれている逆の連関を表現するならば」⁹⁾、BはCである。つまり、BはCへ移行しうる可能性をもっているのである。これは前提されている表象を純化し、分析し、そうして、再び、理論的に合成し、上昇していく方法としては当然の要請であるといってよい。

かくして、Bは自分のもつ欠陥(不充分性)を解決する価値形態・C「一般的価値形態」へ移行するのである。

Cは、すべての商品の価値を唯一の、同じ商品で表現する価値形態である。だから、Cは単純で、統一的で、共同的な価値形態であり、Bの相対的価値形態の三つの欠陥をことごとく解決している。そして等価形態の商品は、あらゆる商品の価値の反射されたものであり、商品世界の唯一の等

貨幣の必然性 (V)

107

価値物、価値の代表者、一般的等価値物である。

さて、われわれは、素材的には全く異なるすべての商品が、商品として登場するための形態をもつためには、人間的労働という共通な同じ単位の物的表現として相互に表示されねばならないということを追跡してきた。

今やこの課題は統一的な、一般的な価値形態である、Cによって達成されている。すなわち「すべての商品は、リンネルという物質によるそれらの共同的な価値表現によって、みずからを交換価値としてそれら自身の使用価値から区別し、同時に価値量として相互に関係する。すなわち質的に等置しあい、量的に比較しあう。この統一的な相対的価値表現において、はじめてそれらすべての商品が相互に価値として現われ、したがってまたそれらの商品の価値が、はじめてその価値に照応する交換価値としての現象形態をえるのである。」¹⁰⁾

このように、Cは「その一般的性格によって、はじめて価値概念に照応する」¹¹⁾ 価値形態であり、「商品世界の社会的表現である」¹²⁾ といえる。そして、すべての商品の価値の表現手段となる商品・リンネルは、その自然的形態が商品世界の共通の価値姿態であり、一般的等価値物である。だから、リンネルをつくる労働は、すべての人間的労働の目に見える化身であり、直接に社会的な形態における労働である。

ところで、マルクスは一般的等価値物である商品・リンネルを「動物そのもの」、「神」といったものと対比しつつ、つぎのように述べている。

「逆の連関となった第二の形態であり、したがって第二の形態に含まれている形態Ⅲにおいては、これに反して、リンネルはすべての他の商品に対して等価値物の類的形態として現われる。それはあたかも、分類されて、動物界のさまざまな、属、種、亜種、科、等々を形成している、ライオン、トラ、ウサギ、および、すべての他の動物とならんで、そのほかになお全動物界の個体的な具体化である動物そのものというものが存在するようなものである。自分自身のうちに同じ事柄の実際に存在しているすべて

108

阪南論集 第11巻第3号

の種を包括しているような個別的なものは、動物そのものとか、神、等々のような一般的なものである。したがって、リンネルは他の一つの商品が価値の現象形態としてのリンネルに関係することによって、個別的な等価値物となったのと同じように、すべての商品にとって共同的な価値の現象形態としては、一般的な等価値物、一般的な価値体、抽象的人間労働の一般的な体化物となる。したがって、リンネルに物質化されている特殊的な労働は、今や、人間的労働の一般的な実現形態として、一般的な労働として妥当しているのである。」¹³⁾

このように、マルクスは一般的等価値物であるリンネルの意義を、一般的なものとして妥当する個別的なものとしてとらえている。つまり商品世界の共同作業によって、唯一の商品・リンネルが相対的価値形態から排除されると、商品・リンネルは価値の表現手段としての役割だけを担うようになる、すなわち一般的な価値鏡として専門化する。そうなるとリンネルは個々の商品と同様、個別的なもの（普通の商品の一つ）でありながら、一般的なもの（商品世界の価値の代表者）として妥当する。すなわち手で触れたり、目で見たりすることのできないものである、あらゆる商品の価値の具現されたもの、つまり神とか動物そのもののようなものとして妥当するのである。

これは、Aにおける貨幣の萌芽としての個別的等価値物の発展である。つまり、 $A \rightarrow B \rightarrow C$ への価値形態の発展は、等価値形態の観点からみれば、個別的なもの→特殊的なもの→一般的なものへの等価値物の発展である。それは一般的なものを潜在的に含む個別的なものの発展であるといえる。つまり種は単なる種ではなくて、類を可能的に含み、分化、発展し、類を形成する。そして類も類を構成する個々の種の外部にある抽象的な普遍としての類ではなく、一つの種（個別的等価値物）でありながら種全体（特殊的等価値物の全体）を包括する類として妥当し、存在しているのである。このことが個別的等価値物と一般的等価値物との関係についていえるのである。^注

貨幣の必然性 (V)

109

注 普遍・特殊・個別の関係については、ヘーゲル『大論理学』の第三巻「概念論」が詳細に検討されねばならない。さしあたり、見田石介『資本論の方法』の第四章「弁証法的方法の本質」を参照されたい。

もちろん、これは表象としての貨幣形態からの抽象、分析という長い探究の過程の結果としてのみ論ずることができることである。

このように、すべての商品の価値が唯一の商品で表現される価値形態・C は価値概念を一般的に充足する表現形態であり、これによって、価値形態の理論的な展開過程は完成する。そして、「動物そのもの」、「神」のようなものである一般的等価物が、一つの特定の商品・金に社会的に癒着し、固定化することにより、貨幣形態・Dが生まれ、金は貨幣となるのである。

さて、以上みたように、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ へという理論的過程は、価値概念とその定在様式（表現形態）との矛盾とそれを解決する価値形態が順次に生みだされる発展過程である。その過程は、各価値形態の定在の必然性を肯定的にみると同時に否定の側面から考察して、移行を実現しているのである。

ところで、この過程は、くり返し述べてきたように、けっして概念の自己展開によっておこなわれているのではなく、貨幣形態から遡及し、抽象してきた過程が、たえず表象に浮べられ、それを分析し、概念として規定を与え、そして再び合成し、上昇しているのである。たとえばマルクスは簡潔に述べている。

「貨幣形態の概念における困難は、一般的等価形態の、したがって、一般的価値形態一般の、形態Ⅲの、理解に限られる。形態Ⅲは、逆の連関で形態Ⅱに、展開された価値形態に分解し、そして形態Ⅱの構成要素は、20 エルレのリンネル＝1 着の上着 あるいは X 量の商品A＝Y 量の商品B という形態Ⅰである。それゆえ、単純な商品形態は貨幣形態の萌芽なのである。」¹⁴⁾

このように、理論的展開は貨幣形態とは何か、価値形態とは何か、を考

110

阪南論集 第11巻第3号

察する探究の過程をたえず前提し、それを表象に浮べ、それを分析しているからこそ、つぎの説明の過程において、最も単純な、抽象的な形態であるAから、発生的に展開することができるのである。つまり対象である事実を徹底的に分析した帰結として、概念的に叙述することができるのである。このように理解してこそ、「価値形態は価値概念から発生する」¹⁵⁾、「貨幣は、価値概念のうちにすでに萌芽としてふくまれている」¹⁶⁾ ということもいえるのである。

- 1) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 23.
- 2) *ebenda*, S. 777.
- 3) *ebenda*, S. 25.
- 4), 5) *ebenda*, S. 778.
- 6) 久留間『価値形態論と交換過程論』30頁。
- 7), 8), 9) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 778.
- 10) *ebenda*, S. 26.
- 11) *ebenda*, S. 779.
- 12) ditto, *Das Kapital*, Buch I., M-E Werke, Bd. 23., S. 81.
- 13) ditto, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 27.
- 14) ditto, *Das Kapital*, Buch I., M-E Werke, Bd. 23., S. 85.
- 15) ditto, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 34.
- 16) F. Engels, *Anti-Dühring*, M-E Werke, Bd. 20., S. 287.

む す び

われわれは、以上のように、宇野理論における貨幣の必然性の主張について検討を加えてきた。その過程で明らかになったことはつぎのとおりである。

第一は、価値の実体規定にもとづく価値の概念を明確に把握しないと、貨幣の必然性はけっして論証できないということである。マルクスは諸商品が交換価値をもつという事実から出発し、それを分析することにより、価値の実体が抽象的人間労働であることを析出している。そして私的所有

貨幣の必然性 (V)

111

と社会的分業にもとづく商品生産者の社会では、まさにこの抽象的人間労働が私的労働の特殊社会的形態をなし、その結晶が価値であるから、価値は商品世界の社会的単位を構成し、社会的関係を表現するものである。このように、価値なる概念は商品世界に独自の社会的なものを表現するものであるから、その定在様式をもたなければならない。つまり価値の表現形態である。マルクスは「単純な価値形態」の分析において、「廻り道」の論理により、等価形態の商品体が価値物であること、自然形態が価値形態であることを論証し、貨幣の秘密を解明している。

ところが、価値概念の欠如している宇野理論は、等価商品を主観的な欲望の対象としてのみ理解し、価値の表現手段であり、等価物であるという等価形態の独自の意義が全く理解されていないのである。

第二は、価値概念からの必然的発生としての価値形態と、その発展諸形態とは、価値概念とそれを充足する定在様式（表現形態）との矛盾（不充分性）から完全に論証される。それは萌芽からの発展であり、価値形態それ自体のもつ内部矛盾の展開であるといえる。そして、商品社会の共通の単位である価値が、統一的に表現される価値形態、「一般的価値形態」の解明によって、価値形態論は理論的には完成する。

ところが、宇野理論によれば価値形態とその発展諸形態を、商品所有者の他商品に対する交換欲望の表明とその拡大過程とみている。その過程は、同時に、交換の困難の拡大過程である。そしてその困難を解決するものとして共通の欲求の対象である一般的等価物を出現させている。だから、貨幣を交換の困難を救助するためのたんなる媒介手段とみているのである。これこそ、貨幣の必然性ではなくて、必要性の主張であるといえる。つまり、貨幣の必然性を、価値概念から、価値形態そのものから、自己原因によって根本的に証明するのではなくて、それとは全く無縁のものである商品所有者の欲望という外的な要因から説明しているのである。

第三に、マルクスは価値形態の論証においても、科学の一般的方法であ

112

阪南論集 第11巻第3号

る徹底した分析的方法の見地に立っている。その方法によって、はじめて、複雑な諸形態が単純な関係に純化され、現象の本質を鋭く把握することができたのである。そして、その本質から再び現象諸形態へ順次に立ち帰るのである。そうしてこそ現象が完全につかまえられるのである。

ところが、宇野理論はこの分析的方法の意義を全く認めず、逆に、その方法を徹底して排除しているので、その「論理」なるものは、たんに現象を歴史的に記述するか、あるいは、分析にもとづかない主観的な「価値」概念の自己展開をおこなうかにすぎないものとなっているのである。

1975年9月30日（完）